

モンゴルの国史編纂と翻訳事業 ——バトオチル抄訳『通鑑』・『綱目』について——

橘 誠

はじめに

報告者はこれまで、モンゴル国のナショナル・ヒストリーにおいてほとんど等閑視されてきたボグド・ハーン政権期の内モンゴルに関する問題を取り上げ、内モンゴルを「モンゴル史」に位置付けることを試み、ナショナル・ヒストリーの弊害について指摘してきた¹。しかしながら、いかなる国家も自らのナショナル・ヒストリーを有し、それ自体は極めて自然で非難されるべきことではなく、時には必要ですらあり、モンゴル国も当然にして例外ではない。そこで、そもそもモンゴル国のナショナル・ヒストリーがいかにして現在ののような枠組みで成立していったのかを考察することが次なる課題となった。

モンゴルでは、1911年に清朝からの独立を宣言した後、ナショナル・ヒストリー編纂のために翻訳をはじめとする種々の準備を進められていたが、これがボグド・ハーン政権期(1911～1921)に実現することはなかった。1921年の「モンゴル革命」により事実上の独立を達成したモンゴル国は、典籍委員会を組織し、本格的に国史編纂に取り掛かった。1927年にはマクサルジャブ・ホルツにより『モンゴル国新史』²が執筆されたが、本書はモンゴルの独立が宣言された1911年前後から1924年の人民共和国の成立までを扱うに過ぎず、一部の研究者に利用されることはあったが、1994年に至るまで刊行されることはなかった。

その後、国家ナーダム委員会は、モンゴル人民共和国成立10周年を記念し、アマル著『モンゴル略史』、デンデブ著『モンゴル略史』、チョイバルサン、ロソル、デミド著『発端と成就』の3冊を1934年に刊行した。1934年に刊行されたこれら3冊の歴史書がモンゴルのナショナル・ヒストリーの基礎になったことは疑いないであろう³。

しかしながら、デンデブとチョイバルサンらの著作が扱った時代はマクサルジャブのそれと重なるため、匈奴からチンギス・ハーンの時代を扱うアマルの『モンゴル略史』がこの時期を扱うモンゴル国史の基礎になったことになる。当初アマルは古代から20世紀までのモンゴル史を執筆する責を負っていたが、チンギス・ハーン時代以降20世紀に至る歴史を書き終えることはできなかったため、1934年に古代から20世紀に至るモンゴルの通史は完成しなかった。いずれにしても、一般的にはアマルが匈奴を初めモンゴル国史に位置付けた歴史家と見なされている。

¹ 橘誠 2011『ボグド・ハーン政権の研究：モンゴル建国史序説 1911-1921』風間書房。

² Н. Магсаржав 1994, *Монгол улсын шинэ түүх*.

³ モンゴル(人民共和)国において刊行された通史については、中見立夫 1988「“モンゴル通史”の空間」『歴史と地理』390、岡洋樹 2011「モンゴルの事例：モンゴルにおける清朝支配期に関する歴史記述の変化をめぐって」『歴史の再定義：旧ソ連圏アジア諸国における歴史認識と学術・教育』などに詳しい。

アマルは『モンゴル略史』執筆に際し、モンゴル語で記された『蒙古源流 *Erdeni-yin tobči*』、『水晶鑑 *Bolur toli*』、『水晶珠 *Bolur erike*』などの年代記の他に、『元史 *Yuan ulus-un sudur*』、『元朝秘史 *Monᡔul-un niᡩuča tobčiy_a*』といった漢語文献のモンゴル語訳を参照している。『元史』、『元朝秘史』はすでに1910年代に翻訳が始められていることから、ボグド・ハーン政権がチンギス・ハーン、元朝をすでに意識していたことが窺われる。また、巻末の参考文献リストには含まれていないが、文中ではダンダー(デムチグドルジ)の翻訳した『聖武親征録 *Boᡩda bayatur-un bey_-e-ber dayiluᡩsan temdeglel*』も引用している。しかしながら、これらの文献は主にチンギス・ハーンの事績を執筆するために利用されているに過ぎない。そこで、それ以前の歴史、すなわちモンゴル語史料のない匈奴、鮮卑、柔然、突厥などについて如何に記述したのであろうかという疑問が生じてくるのである。

アマルは参考文献リストにおいて、*g'ang mu bičig ba nebterkei toli-yin tegübüri* (『ガン・ムー・ビチグとネフテルヒー・トリの抜粋』)なる文献を挙げている。そのタイトルから、これが漢語文献の翻訳であろうことは容易に推測できるが、管見の限り、これまでこれらの文献に関する本格的な研究は行われていないようである。本報告の目的は、*g'ang mu bičig ba nebterkei toli-yin tegübüri* がいかなる文献であるかを特定し、モンゴル国史の一部となった匈奴史執筆においてアマルがこれに多くを拠っていたことを明らかにし、アマルの「モンゴル史」の枠組みがいかに形成されたのかを探ることにある。

1. *g'ang mu bičig ba nebterkei toli-yin tegübüri* とは？

モンゴル国立図書館には、*nebterkei toli g'ang mu bičig-eče tegübürlegsen bičig* (「ネフテルヒー・トリ、ガン・ムー・ビチグから抜粋した書」)という3セットのマニュスクリプトが所蔵されている(78-81/96、1109-1112/96、1558-59, 8244-45/96)。このマニュスクリプトを見てみると、実際には「ネフテルヒー・トリ」が主であり、「ガン・ムー・ビチグ」は補足のために利用され、「ガン・ムー・ビチグ曰く・・・」と記された別紙が関連する箇所に張り付けてある。アマルが文献リストに挙げた *g'ang mu bičig ba nebterkei toli-yin tegübüri* とはこの文献に相違ない。

このマニュスクリプトとアマルの『モンゴル略史』を読み比べていくと、匈奴史の部分(第2章)はこの *nebterkei toli g'ang mu bičig-eče tegübürlegsen bičig* の要約のようであり、しかもある部分についてはほぼそのまま引用されていることに気付く。それでは、「ネフテルヒー・トリ」、「ガン・ムー・ビチグ」とはいかなる文献なのであろうか。

「ネフテルヒー・トリ、ガン・ムー・ビチグから抜粋した書」の奥書には、
満洲語で書かれた「ネフテルヒー・トリ」80冊8函、「トン・ギャン・ガン・ムー」
95冊24函からモンゴルに関する重要な部分を選び、モンゴル国典籍委員会委員、官吏、イフ・シャビのザイサン・バトオチル・シャダル・ビリクトが調べてモンゴル語に翻訳した。

と記されている。よって、「ネフテルヒー・トリ」と「トン・ギャン・ガン・ムー」は満洲語の文献ということになる。訳者のバトオチル(1866, 1873, 1874?-1934, 1935?)は、『旭日の光 *mangdaqu naran-u tuyay_a*』という啓蒙書でも有名である。

1-1. ガン・ムー・ビチグ

まずは、朱熹の『資治通鑑綱目』の略称であろうと容易に想像できる「ガン・ムー・ビチグ」について見ていく。すでに、満洲国においてモンゴル語に翻訳された『資治通鑑綱目』については別に紹介したことがある⁴ので、ここでは簡単に説明するにとどめる。

バトオチルが訳した「ガン・ムー・ビチグ」は、朱熹の『資治通鑑綱目』だけではない。実際には、満洲語版「ガン・ムー・ビトへ *g'ang mu bithe*」は、1691年に和素によって翻訳され刊行された『資治通鑑綱目』、『資治通鑑綱目前編』、『続資治通鑑綱目』を指す。

『資治通鑑綱目』59巻は朱熹により編纂された司馬光『資治通鑑』294巻の要約版であり、1219年に刊行された。南軒により編纂された『資治通鑑綱目前編』(1595)は金履祥『通鑑前編』、陳桎『通鑑続編』を利用し、『通鑑綱目』以前の時代、盤古、伏羲から周威烈王を扱ったものであり、商輅編纂の『続資治通鑑綱目』(1476)は宋元時代を扱う。

1-2. ネフテルヒー・トリ

「ネフテルヒー・トリ」は現代モンゴル語では、「百科事典」の意味であるが、“*toli*”は「鑑」、「*nebterkei*」は「通」と訳し得るので、“*nebterkei toli*”は「通鑑」の直訳であると推測できる。ただ、「通鑑」と言えば『資治通鑑』が真っ先に思い浮かぶが、『資治通鑑』自体が満洲語に翻訳されたことはなく、また「ネフテルヒー・トリ」には盤古から宋元も含まれているので、『資治通鑑』ではあり得ない。

満洲語文献の目録や研究書には、達海により翻訳された「通鑑 *hafu buleku bithe*」なる文献を見出すことができ、これは王世貞の『綱鑑会纂』の満洲語訳で1644年に刊行されたと記されている⁵。タチアナ・パンも「ダハイは明の学者・王世貞の中国史に関する著作『綱鑑会纂』の翻訳に着手し、その翻訳は1644年に刊行された⁶」と記している。

すでに19世紀のモンゴル年代記においても、ラシボンサグが『水晶珠 *Bolur erike*』を執筆する際に「ネフテルヒー・トリ」を利用していたことが知られており、また、モンゴル独立宣言後の1914年10月2日、ツァハル部隊の指揮官であるドンロブが、モンゴルの国会に『ガン・ムー・ビチグ』や『ネフテルヒー・トリ』などを翻訳するよう提案している⁷。すなわち、満洲語訳『通鑑 *hafu buleku bithe*』はバトオチルの翻訳以前に「ネフテルヒー・トリ」の名ですでにモンゴル人の間では知られていたことになるのである。

⁴ 橋誠 2011「モンゴル語訳『資治通鑑綱目』について」『日本モンゴル学会紀要』41。

⁵ 『北京地区満文図書総目』遼寧民族出版社、2008。

⁶ Татьяна Александровна Пан 2006, *Маньчжурские письменные памятники по истории и культуре империи цин XVII-XVIII вв.*, Санкт-Петербург, 92-93。

⁷ *Монгол улсын дээд, доод хурал(баримт бичгийн эмхтгэл)*, I (1914-1916), Улаанбаатар, 2003, №22, 76-77。

2. アマル著『モンゴル略史』と「ネフテルヒー・トリ」

すでに述べたように、アマルは匈奴史の執筆に際し、満州語訳『通鑑 hafu buleku bithe』のモンゴル語訳である「ネフテルヒー・トリ」を利用していた。そこで、以下にアマル『モンゴル略史』の匈奴史の一部と、これに該当するであろうと思われる「ネフテルヒー・トリ」の部分を比較してみたい。

元狩四年（前119年）の出来事

- (Amar) jangjun vei čin, qo giüi bing-dur tus tus tabun tümen čerig ögčü,
將軍衛青、霍去病にそれぞれ五万の兵を与え、
- (nebterkei toli) yeke jangjun wei čing, piyauu ki jangjun ho giüi bing-dur tabuyad tümen čerig ögebe.
大將軍衛青、驃騎將軍霍去病に五万ずつの兵を与えた。
- (Amar) jangjun vei-yin čerig kijayar yarču nigen mingyan ilegüü yajar yabuju,
將軍衛の軍は国境を越え、一千里余りの地を行き、
- (nebterkei toli) yeke jangjun wei čing-un čerig kijayar yarču nigen mingyan-u yajar ilegüü yabuju,
大將軍衛青の軍は国境を越え、一千里の地を越えて行き、
- (Amar) hiügnü-yin yajar-tur kürčü, kümün-i alaysan anu qoyar tüme siqam toyan kürčü,
匈奴に地に至り、人を殺害したのは二万ほどの数に達し、
- (nebterkei toli) hiongno ulus-un yajar-tur hürčü hümüm-i alaysan anu nigen tümen yisün mingya bui,
匈奴国の地に至り、人を殺害したのは一万九千人であり、
- (Amar) tegün-eče tngri ayulan-dor hürčü, hiügnü ulus-un qoriyaysan amu-yi sitayaju bučaba.
そこから天山に至り、匈奴国の集めた粟を焼いて帰った。
- (nebterkei toli) tugüneče tiyen yan san ayula, juu sin-u sayuysan qota-dur hürčü, hiongno ulus-un qoriyaysan amu-yi olju čerig-tur idegölün, nigen edür üjeju, qotan-u ülegsen amu-yi gal talbiju qoyisi egebe.
そこから竇顔山、趙信の駐留した城に至り、匈奴国の集めた粟を得、軍に食べさせ、一日留まり、城の残った粟を焼いて帰った。
- (Amar) jangjun qo kiüi bing-un čerig qoyar mingyan ilegüü yajar yabuju,
將軍霍去病の軍、二千里余りの地を行き、
- (nebterkei toli) piyauu ki jangjun qo süi bing-un čerig dai yajar-bar yarču iü be ping-un yajar-ača qoyar mingyan yajar ilegüü yabuju,
驃騎將軍霍去病の軍、代の地を出て右北平の地から二千里の地を越えて行き、

- (Amar) lang giüi siüi ayula-dur sirui-bar dobu kijü temdeguleged,
狼居胥山において土を盛って記しをつけ、
- (nebterkei toli) lang hiui siüi ayulan-dur sirui-bar dobu kijü temdeguleged gu yan san
ayulan-dur tayiba.
狼居胥山において土を盛って記しをつけ、姑衍山において祭った。
- (Amar) qan qai dalai-dur kürčü hiüngnü ulus-i dayilju doluyan tümen yarui kümün-i bariba.
瀚海に至り、匈奴国を攻め、七万以上の人を捕えた。
- (nebterkei toli) han hai dalai-dur kürčü hiongno ulus-un kümün-i alab. Bariγsan anu doluyan
tümen dörben jayun döčün γurban bui.
瀚海に至り、匈奴国の人を殺害した。捕えたのは七万四百四十三人であった。
- (Amar) ene qoyar anggi-yin čerig očiui-dur bögüde mori arban dörben tümen bölüge.
この両軍は出撃の際には馬は全部で十四万匹であった。
- (nebterkei toli) qoyar čerig jaq_a γaraui-dur üjebese, qayan-u morin, öberün morin bögüde
arban dörben tümen bölüge.
両軍が国境を越える時にはハーン(官)馬、私馬全部で十四万匹であった。
- (Amar) bučaui-dur γurban tümen hüreku ügei egegsen ajuγu kemegsen ba,
帰還した時には三万にも満たずに戻ってきたと言う。
- (nebterkei toli) qojim kijayar-tur oruγsan anu γurban tümen küreku ügei boluγsan ajuγu.
後に帰還したのは三万にも満たなくなっていた。
- (Amar) basa qan ulus-un čerig-ün kümün-ü ükügsen inü mön kedün tümen bui kemejüki.
漢国の軍の人で死んだ者は数万人であったと言う。
- (nebterkei toli) tere čaytu han ulus-un čerig hiongno ulus-un kümün-i alaysan, oluγsan anu
bögüde nayiman yisün tümen bui. han ulus-un čerig-ün kümün-ü kügsen inü mön
kedü kedün tümen bui.
その時、漢国の軍が匈奴国の人を殺害、捕縛したのは全部で八、九万人で
あった。漢国の軍の人で死んだ者はまた数万人であった。

以上の比較から、アマルが「ネフテルヒー・トリ」を一部の書き換え、一部の省略をし
ながらもほぼそのまま引用していたことは明らかである。

3. 「ネフテルヒー・トリ」と『綱鑑会纂』

では、「ネフテルヒー・トリ」の翻訳元である『通鑑 hafu buleku bithe』は本当に『綱鑑会纂』の満洲語訳なのであろうか。ここでは、「ネフテルヒー・トリ」と『綱鑑会纂』を比較してみるが、実際に「ネフテルヒー・トリ」に記された内容に該当するものが『綱鑑会纂』に見当たらないことが多々ある。『綱鑑会纂』は『通鑑綱目』を元になっているが、それらの記述は『通鑑綱目』にも見当たらない。そこで、『通鑑綱目』の元となる『資治通鑑』も合わせて比較してみる。

(nebterkei toli)	yeke jangjun wei čing, piyauu ki jangjun ho giüi bing-dur tabuyad tümen čerig ögebe.
(綱鑑会纂)	令大將軍青驃騎將軍去病各將五萬騎
(資治通鑑)	令大將軍青驃騎將軍去病各將五萬騎
(nebterkei toli)	yeke jangjun wei čing-un čerig kijayar yarču nigen mingyan-u yajar ilegüü yabuju,
(綱鑑会纂)	該当なし
(資治通鑑)	大將軍出塞千餘里
(nebterkei toli)	hiongno ulus-un yajar-tur hürčü hümüm-i alaysan anu nigen tümen yisün mingya bui,
(綱鑑会纂)	該当なし
(資治通鑑)	・・・捕斬首虜萬九千級
(nebterkei toli)	tugüneče tiyen yan san ayula, juu sin-u sayuysan qota-dur hürčü, hiongno ulus-un qoriyaşan amu-yi olju čerig-tur idegölün, nigen edür üjeju, qotan-u ülegsen amu-yi gal talbiju qoyisi egebe.
(綱鑑会纂)	該当なし
(資治通鑑)	遂至竇顔山趙信城、得匈奴積粟食軍、留一日悉燒其城餘粟而歸。
(nebterkei toli)	piyauu ki jangjun qo süi bing-un čerig dai yajar-bar yarču iü be ping-un yajar-ača qoyar mingyan yajar ilegüü yabuju,
(綱鑑会纂)	去病出代右北平二千餘里
(資治通鑑)	票騎將軍・・・出代右北平二千餘里
(nebterkei toli)	lang hiui siüi ayulan-dur sirui-bar dobu kijü temdeguleged gu yan san ayulan-dur tayiba.
(綱鑑会纂)	封狼居胥山禪於姑衍
(資治通鑑)	封狼居胥山禪於姑衍

- (nebterkei toli) han hai dalai-dur kürčü hiongno ulus-un kümün-i alab. Bariγsan anu doluγan tümen dörben jaγun döčün γurban bui.
- (綱鑑会纂) 登臨瀚海斬首七萬級
- (資治通鑑) 登臨瀚海鹵獲七萬四百四十三級
-
- (nebterkei toli) qoyar čerig jaq_a γaraqui-dur üjebese, qayan-u morin, öberün morin bügüde arban dörben tümen bölüge.
- (綱鑑会纂) 該当なし
- (資治通鑑) 兩軍之出塞塞閱官及私馬凡十四萬匹
-
- (nebterkei toli) qojim kijayar-tur oruγsan anu γurban tümen kürekü ügei boluγsan ajuγu.
- (綱鑑会纂) 該当なし
- (資治通鑑) 而復入塞者不滿三萬匹
-
- (nebterkei toli) tere čaytu han ulus-un čerig hiongno ulus-un kümün-i alaysan, oluγsan anu bügüde nayiman yisün tümen bui. han ulus-un čerig-ün kümün ükügsen inü mön kedü kedün tümen bui.
- (綱鑑会纂) 而漢士卒物故亦數萬
- (資治通鑑) 是時漢所殺虜匈奴合八九萬而漢士卒物故變數萬

このように、「ネフテルヒー・トリ」には『綱鑑会纂』に含まれていない情報が数多く訳出されていることになるのである。このことは、もちろん「ネフテルヒー・トリ」が満州語訳『通鑑 hafu buleku bithe』のモンゴル語訳でない可能性を否定しないが、『通鑑 hafu buleku bithe』が『綱鑑会纂』の翻訳ではなかった可能性の方が高いであろう。それは、バトオチルが「ネフテルヒー・トリ」を 80 冊とし、『通鑑 hafu buleku bithe』も 80 冊からなることから確認できよう。

では、満州語訳『通鑑 hafu buleku bithe』は一体何を翻訳したのであろう。手掛かりの一つは、霍去病が捕えた匈奴人の数「七萬四百四十三級」とは『資治通鑑』に出てくる数字であり、『資治通鑑綱目』、『綱鑑会纂』には「七萬級」とある。すなわち、『資治通鑑綱目』を利用した『綱鑑会纂』をはじめとする多くの「綱鑑」には「七萬四百四十三級」という数字は出てこないのである。一方で、『通鑑 hafu buleku bithe』は盤古から宋元を含むため『資治通鑑』の翻訳という可能性はない。考えられるのは、『資治通鑑』を利用し、尚且つ盤古から宋元を含む「綱鑑」のいずれかということになるだろうが、これを特定するには未だ至っていない。これは、17 世紀の満洲人がどのような歴史書を愛読していたのか、どのような出版物が北方に普及していたのかという問題にもつながるかと思う。

4. バトオチル『モンゴル国の古来伝承を略記した書』(1927年)について

アマルの著作を考察するに際し、なぜアマルがモンゴルの民族名の起源やチンギスの先祖からではなく、匈奴から記述を始めたのか、なぜ匈奴が「モンゴル史」に含まれたのかという疑問が生じる。この疑問については、旧ソ連の民族共和国史の事例が参考になりそうである。

旧ソ連を構成していた中央アジア諸国では、それぞれの民族名を関した共和国史が構築されていったが、それはその民族の来歴を中心としたものではなく、あくまでその共和国の領域上に活動した様々な集団の歴史を扱うというものであった。すなわち、民族はその土地に根差して形成されていくという発想である。このような方法によれば、ある民族の起源をその名称に関わらずその土地で活動していたあらゆる集団に求めることが可能となるのである⁸。

このような発想に拠れば、アマルが匈奴をモンゴル史に含めた理由は明白であり、事実、われらがモンゴル地方には古代よりモンゴル、トルコ、女真の三つの民族が居住し、交代で政権を樹立しており、そのうちの一つが主導的に政権を確立すると、残りの二つの民族はその中に含まれていたということは既に述べたところである。如上の理由により、モンゴル民族の政治史を語るに際し、残りの二つの民族は不可欠であり、この三つの民族の中で最初に政権を樹立したのは匈奴であるので、モンゴルの歴史を研究するほとんどの研究者が匈奴を起源とするのであった。中国の数多くの史書に、匈奴はモンゴルの先祖であると記録しており、これに依れば匈奴がモンゴルの先祖であることは疑いのない事実である。

とアマル自身が記していることから窺い知れる。よって、1934年の「モンゴル史」執筆におけるソ連の指導の可能性を考えることもできる。しかしながら、ここではアマルが「モンゴル史」を記述する際に大いに参考にしたと思われる文献を検討してみたい。それが、『モンゴル略史』の参考文献にも挙げられているバトオチルの『モンゴル国の古来伝承を略記した書 *Monᡔul ulus-un erten-eče ulamjilan iregsen-i tobčilan temdeglegsен bičig*』である。

この書の序言において、バトオチルは、

思うに、モンゴル国が古より現在に至るまで時代とともに名前を変えたことは数多くあったが、太祖チンギス・ハーンより以前の古代を詳細に示した書は多くはない。清国の満州語の書を見るに、極めて詳細であるというものを見たことはないが、少しではあるが簡略に記したものはあるので、モンゴル語にすれば多くの児童に少しは役に立つのではないかと思い、自らの無学を顧みず、仕事の合間に満州語の『通鑑』(ネフテルヒー・トリ)という書、三編の『綱目』という書、『表伝』という書を調べ、モンゴル国の国家成立の時代を簡略に一つ一つ調べてモンゴル語に翻訳し、28章に分けて

⁸ 宇山智彦 2005「旧ソ連ムスリム地域における『民族史』の創造」『イスラーム地域の国家とナショナリズム』(イスラーム地域研究叢書⑤)、東京大学出版会。

一冊にまとめ、有識者に見せて訂正させ、モンゴル国の教育省に奉呈した。望むのは、刊行して学校の児童に配れば古来のモンゴル国の時代時代の名前、興亡した時の概略を知ることができるであろうと思い、モンゴル国典籍委員会委員であるハン・ヘンディ・アイマグのウンドゥル・ハン旗の愚かな書記バトオチルが序言を記した。

モンゴル国 27 (1927) 年 4 月 24 日

西暦 1927 年 5 月 24 日

と記している。すなわち、モンゴル高原に勃興した諸民族全てを「モンゴル」と見なし、名前を変えて継承してきたとする立場をとっている。その目次は以下の通りである。

- | | |
|----------------------|------------------------|
| 1. モンゴル国の領土の状況 | 15. モンゴルの薛延陀の時代 |
| 2. モンゴルの山戎および薰育の時代 | 16. モンゴルの安祿山の時代 |
| 3. モンゴルの獯粥国の時代 | 17. モンゴルのウイグル(回鶻)国 |
| 4. モンゴル諸族が漢族を攻めた時代 | 18. 契丹国の時代 |
| 5. 西戎?モンゴルが漢族を侵略した時代 | 19. モンゴル族の後唐国と晋国の時代 |
| 6. モンゴルの匈奴国の興隆した時代 | 20. 西夏の時代 |
| 7. 匈奴国の内部混乱の時代 | 21. 金国の時代 |
| 8. モンゴルの鮮卑国の時代 | 22. モンゴルの大元国の時代 |
| 9. モンゴルの趙国の時代 | 23. トゴン・トゥムル・ハーン後の時代 |
| 10. モンゴルの燕国の時代 | 24. 大清国の満洲ハーンの時代 |
| 11. モンゴルの柔然国の時代 | 25. ハルハ四部の時代 |
| 12. モンゴルの夏国の時代 | 26. 青海ウールドのグーシ・ハーンの事績 |
| 13. モンゴルの魏国の時代 | 27. オイラドのガルダン・ボショクトの事績 |
| 14. モンゴルの突厥の時代 | 28. トルゴートのアヨシ・ハンの事績 |

チンギス・ハーン以前の部分は全てアマルの『モンゴル略史』にも含まれていることから、アマルがバトオチルのこの書に多くを拠ったことは間違いないであろう。

では、そもそもバトオチルがこの書を執筆するに至った動機は何だったのであろうか。典籍委員会成立直後の第一回会議(1921年11月22日)において決議された9項のうち第5項において、すでに「満洲語の書よりモンゴル国に関連する事項をザイサン・バトオチルが翻訳し、まとめて記す⁹」と決定されていた。すでに、「ネフテルヒー・トリ」や「ガン・ムー・ビチグ」の翻訳は1910年代から提案されており、それが人民政府成立直後には実行に移されたことになる。また、ボグド・ハーン政権期に開始されたダンダーによる『元史』の翻訳が「モンゴル革命」後に再開されていることから、歴史編纂およびそれに携わる人材におけるボグド・ハーン政権と人民政府の連続性を指摘することは可能であろう。

⁹ Монгол Улсын Үндэсний Түүхийн Архив. Ф23-Д1-ХН6. Arban nигedүгeр, мөн arban qoyaduғur on-u sudur bičig-ün küriyeleng-ün qural-un toyтағal dangsa.

2年後の1923年8月3日のモンゴル人民党第2回党大会第8回会議においてバトオチルが典籍委員会の活動に関する報告を行い、

モンゴル史を執筆することに関しては、この間、満洲語の『ネフテルヒー・トリ』という八函八〇冊、『トン・ギャン・ガン・ムー』という二十四函九十五冊からモンゴル民族が五千年の昔からどのような名前で来たのか、そして強弱、興亡がどのように行われたのか、また後にチンギス・ハーンが誕生し、諸国をどのように支配下に収めたのか、さらにフビライ・セツェン・ハーンの時代に元朝を興し、外国にいかに進出したのかなどの事項を簡略に翻訳している。また、元朝についての漢語の歴史二一〇巻(『元史』一報告者)を、現在モンゴル語訳している¹⁰。

と述べている。すなわち、バトオチルは、1921年より「ネフテルヒー・トリ」、「ガン・ムー・ビチグ」の抄訳を開始し、1927年にはその翻訳を利用して『モンゴル国の古来伝承を略記した書』を執筆したことになる。

このように、バトオチルの『モンゴル国の古来伝承を略記した書』にマクサルジャブ・ホルツの『モンゴル国新史』を加えれば、1927年には「モンゴル通史」は一応は完成していたことになる。ここで問うべきは、なぜ1934年に新たな通史が計画されたのかという問題であるが、これは今後の課題である。

おわりに

以上、モンゴルの国史編纂過程の一端をアマル著『モンゴル略史』(1934)を素材に考察してみた。モンゴルの国史編纂は新国家のための新国史であり、ナショナル・アイデンティティーの構築にも関連する重要なテーマであると思われるが、刊行された「通史」は別として、編纂の過程や未刊行の文献などはこれまであまり注目を集めてこなかったと思われる。本報告により、1934年の「モンゴル通史」以前に、すでに『通鑑』や『通鑑綱目』を利用したバトオチルの『モンゴル国の古来伝承を略記した書』やマクサルジャブの『モンゴル国新史』により「モンゴル史」の原型はほぼ出来上がっていたことが明らかになった。しかしながら、その完成直後の1928年よりモンゴル人民共和国はいわゆる「左翼偏向」の時代に突入し、1934年に新たな「モンゴル通史」が刊行された。バトオチル(1934?)、マクサルジャブ(1935)はこれに前後してこの世を去っている。日本においても、「国史」編纂は多難であった¹¹が、この間(1927~1934)モンゴルの国史編纂方針にいかなる変化があり、これにソ連はどのように関わっていたのか、あるいは関与していなかったのか、解明すべき課題は山積している。

¹⁰ Монгол Улсын Үндэсний Түүхийн Архив. Ф23-Д1-ХН139-3.

¹¹ 明治政府は修史局(修史館)を設立して全国各地で古文書調査を実施したが、『大日本編年史』はついに刊行されず、『大日本史料』を刊行するのみであった(小路田泰直 2004「国史の誕生と『大日本編年史』編纂の中止」東京大学史料編纂所編『歴史学と史料研究』山川出版社)。